都市プランナー
田村明の生涯（案）
～HP　版～

2017・7・14

東　　秀紀

本日のスケジュール

- 全体の方針（趣旨、分量、章立て）
- 内容（今日はできたところまでを中心に）

第1章　本論文の目的

第2章　青少年・社会人時代

第3章　横浜市時代

------[ココまで書いたが]

第4章　大学教授時代

第5章　総括と評価

Ⅰ．全体の方針

趣旨

- 国際都市計画史協会IPHS2018（横浜）で田村明を取り上げるに際し、説明用のプロフィールを執筆する
- 田村明＝戦後日本の代表的「都市プランナー」として描く
- 問題提起

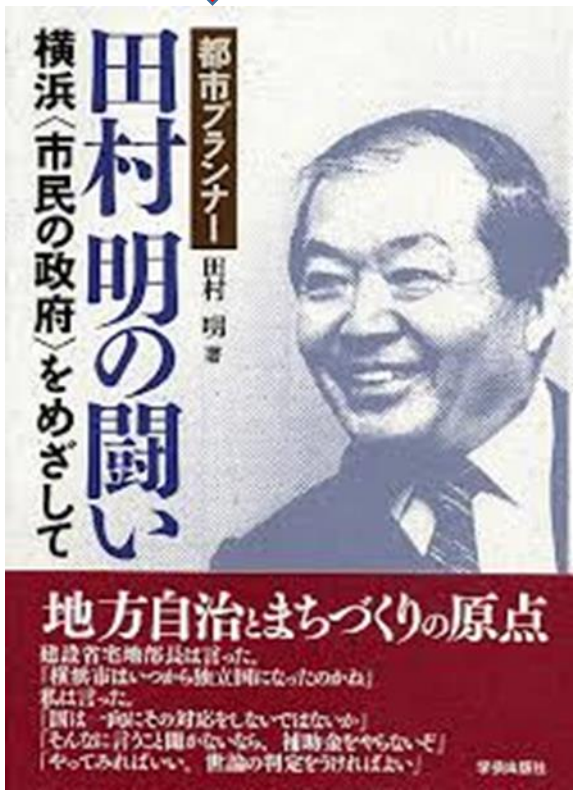
①彼はなぜ「代表的」なのか

②彼が後世に残したものは何か

などを、その生涯をたどりながら分析する

執筆の方針

- ①個人的エピソードを入れて、わかりやすく且つ客観的に書く
- ②外国への紹介を念頭におく
- ③田村明の生涯と業績を軸に、戦後日本の都市計画史を織り交ぜる
- ④田村明を「都市プランナーtown planner」とする



cf: 地域政策プランナー　本人は称しているが…

まちづくりプランナー　「まちづくり」の英訳によっては違う意味に

都市プランナー　town/city/urban planner　万国共通

都市計画家　本人は「プランナー」と自己を表記

都市デザイナー　urban designerは、厳密には分野が異なる

章構成案

[　]内数字は400字詰め枚数

- 1.本論文の目的[3]
- 2.青少年、社会人時代[8]
  - 1)家庭環境
  - 2)建築学科進学
  - 3)就職
- 3.横浜市時代[13]
  - 1)革新市政
  - 2)田村明の入庁
  - 3)6大プロジェクト

[ここまで書いたが…再考要！]

- 4.大学教授時代[5]
  - 1)横浜市を去る
  - 2)まちづくりの伝道者
- 5.総括と評価[3]
  - 1)総括
  - 2)評価

[4・5章の資料が少ない！]

Ⅱ.内容　　第1章　本論文の目的

- 目的：田村明＝戦後日本の代表的都市プランナーとして紹介すること
- 「日本建築学会大賞」2000年　受賞
  「都市づくりの理論及び手法の構築とその実践」
  （都市計画のうち、実践的プランナーの大賞受賞者は彼のみ）
  cf：高山英華、西山卯三、石田頼房、本城和彦…学者
  丹下健三、槇文彦、大谷幸夫…建築家
- しかし、田村の名は必ずしも国際的に（日本でも一般的には）知られていない→その状況を改善するのが究極の目的

彼が知られていない理由

- 田村個人というより、日本の都市計画の性格に原因
- ①国家官僚体制の強さ

  1970年前後まで、都市計画は国家官僚の主導で行われてきた

  同じく「市民参加」も法的に明記されなかった

  今も上記両方の色彩は残る
- ②プランナーの無名性

  政治経済界の指導者（渋沢栄一、後藤新平etc.）、

  建築家（丹下健三etc.）と比べ、個別のプランナー

  （自治体職員含む）の地位が脆弱

しかし、欧米では

- 都市計画を担う地方自治体においても、個人として歴史に残るプランナーが存在する
- 例：ブルーノ・タウト（ベルリン）、レイナー・バンハム（シカゴ）、エドモンド・ベーコン（フィラデルフィア）、アラン・ジェイコブス（SF）
- 仮説：田村明は、地域に根ざした日本最初の実践的都市プランナー
- 意義：①今後の日本都市計画発展への寄与
  ②特にプランナーへの一般的認識度の向上

第2章.青少年、社会人時代

- 1926　東京の無教会主義キリスト教徒の家の三男に生まれる
  父はNCRセールスマン、母は幼稚園教諭で、知的なものへの
  関心が高い堅実な中流家庭
- 1931　青山師範附属小学校（現：学芸大付属小）に入学
  電車で通いながら、当時の東京山の手を探索

旧制静岡高校に進学し、終戦を迎える

- 旧府立一中・旧制静岡高校で軍国主義的教育に遭遇するが、終戦を迎える
- 戦後は旧制高校に残る知的エリートの自由さを味わう
- 寮対抗の文化祭で演劇をプロデュースし、優勝

１９４７東大建築学科に入学

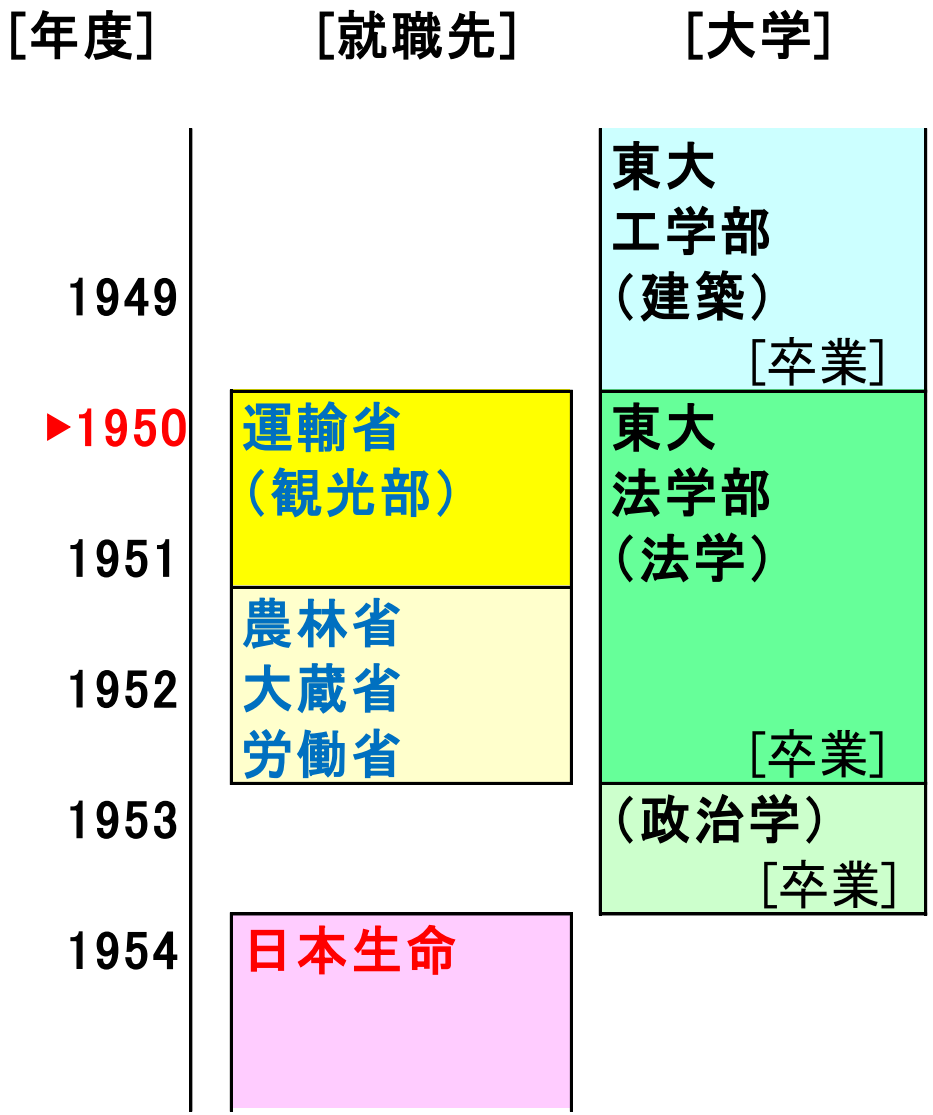
- 建築に入った理由＝文系・理系の混じった「総合性」
  「工学部のなかで、唯一“工学”とついていない学科」
  建築史などにも興味をもち京都、奈良を旅行
- 卒業研究→「大都市地域構造の変動に関する研究」
  都市計画→丹下健三研究室＊
  ＊丹下の専門は厳密には「都市設計」だったが、
  「都市計画」が専門の高山英華がいたのは
  第二工学部（千葉）だった

浅田孝との出会い

- 丹下研には「都市計画」が専門の特別研究員＝浅田孝がいて、薫陶を受ける
- 「図面を描かない建築家」（川添登）浅田は、「日本で最初のプランナー」（笹原克）だった
- 田村明は卒論「大都市地域構造の変動に関する研究」を書きながら、都市計画を自分の職業にしようと、国家公務員試験を受けることを決めた

国家官僚（運輸省etc)と東大法学部を掛け持ち

- 1950　運輸省大臣官房観光部に入省
  同時に東大法学部にも入学
- 1951　運輸省を依願免官、大蔵、農林、
  労働省を転々と入省（～53）
  [cf：1947　内務省廃止]
- 1953東大法学部卒業
  同　東大法学部政治コース入学(～54)
- 都市計画のために法律を学ぶも、国家官僚の体質になじめぬものを感ずる
- 1954　日本生命入社



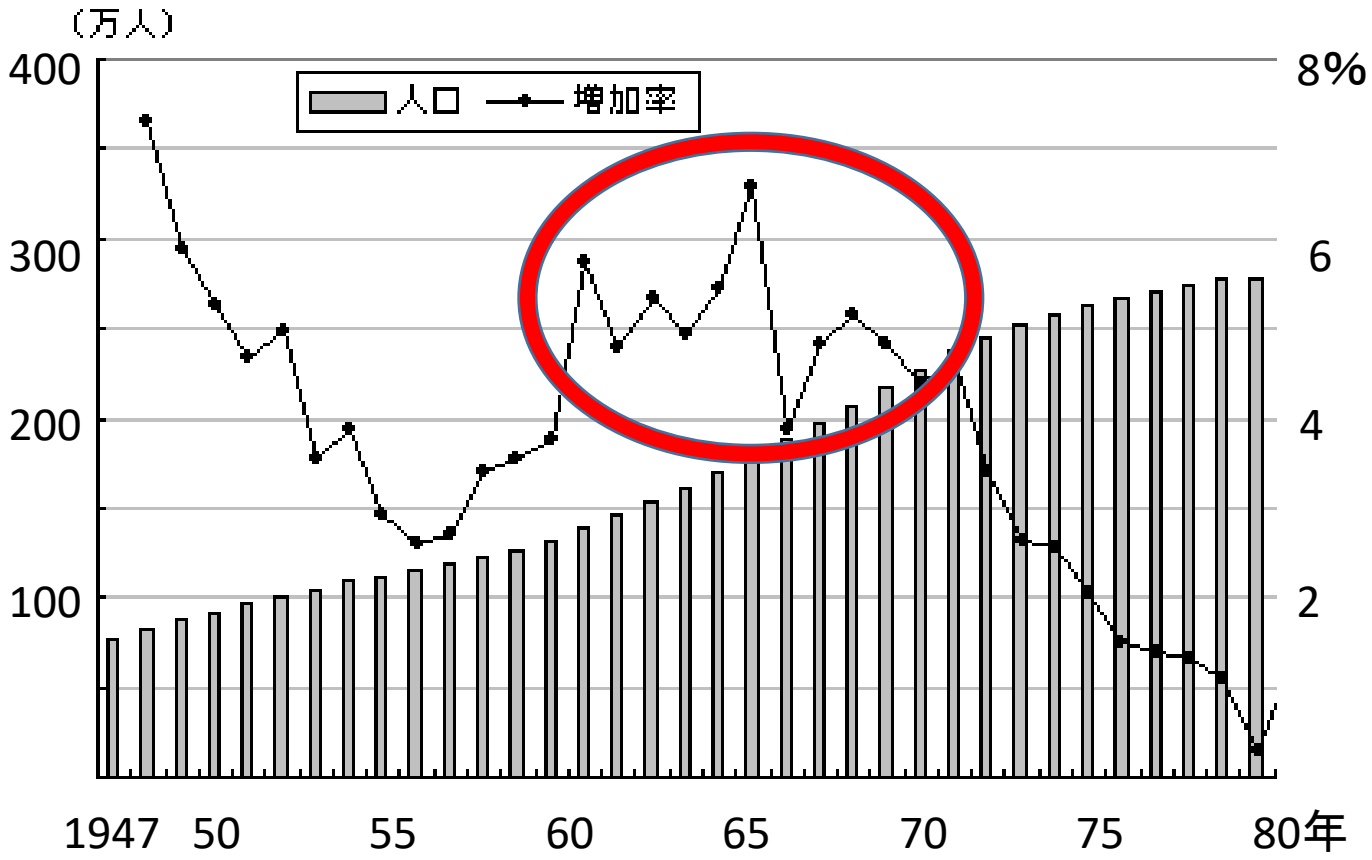
日本生命勤務時代（1954～63）：四時から男

- 本社（大阪）で不動産業務に従事（事務所、社宅、日生球場など）
- 就業時間後のクラブ活動、土日旅行とエピキュリアン的人生を楽しむ
- 1960無教会式で結婚
- 「しかし、一度きりの人生が果たして、これでよいのか」
- 恩師丹下健三に悩みを訴え、環境開発センターを開所したばかりの浅田孝に相談するよう勧められる

環境開発センターに入社

- 当初、日本生命に勤務しながら、環境センターの仕事を手伝う
- 「地域計画機関のあり方について」(1962)を浅田に提出
  都市計画＝「土木・建築の外延ではなく、都市を経済的・社会的に分析し、法律・経営技術などを綜合的に駆使する新分野」と定義
- 1963　意を決して日本生命を退社、
  環境開発センターに入社(36歳)
- 「一生燃焼し続ける対象を持ってゆきたいと思います」
  (妻と連名での退職挨拶状)

第3章　横浜市時代
1960年代と横浜市



資料：横浜市

- 60年安保以後、時代のエネルギーは経済へ→高度成長時代
- しかし、行き過ぎた高度成長が都市問題を生む
- 横浜でも京浜工業地帯の公害発生、東京からの人口増加への圧力（1960～70年で、100万人増加、毎年の人口増加率5%以上）

飛鳥田市政の誕生

- 1960　安保闘争（「安保５人男」）
- 1963　保守乱立のなかで市長に当選
- 1963～67　[第一期]

  一万人市民集会

  福祉予算の充実
- しかし、物的計画の必要性も認識

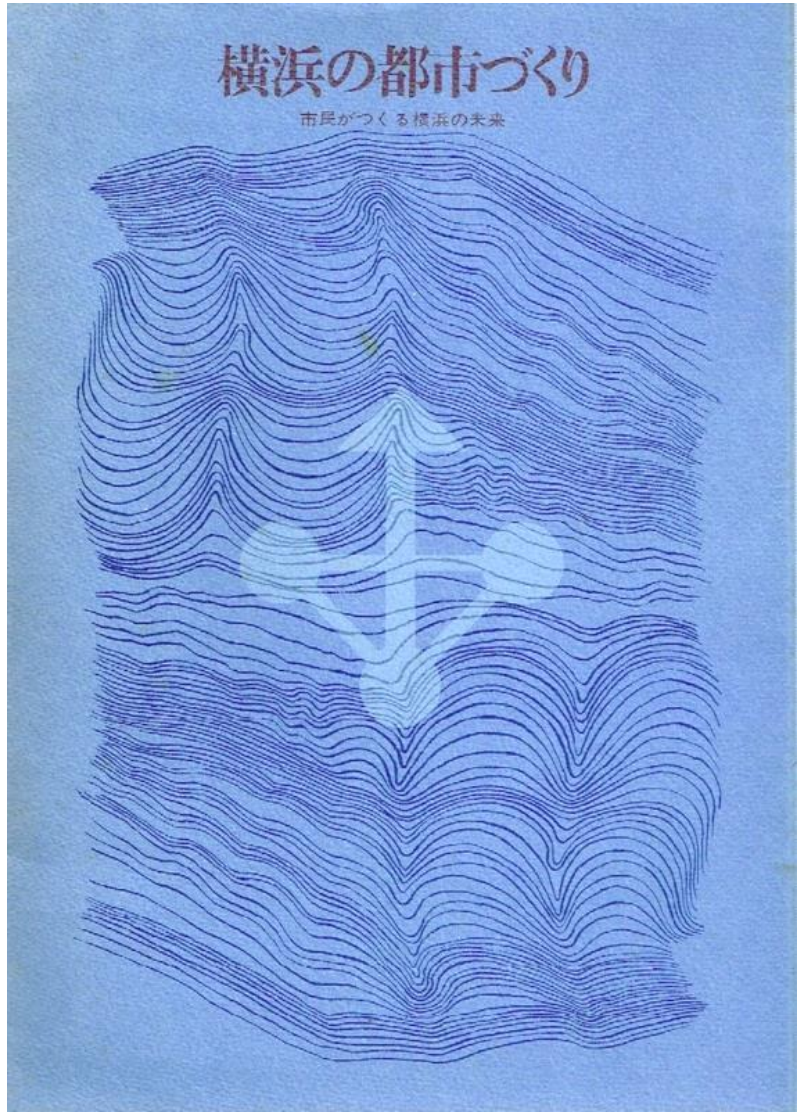
「都市をフィジカルに変えなければ改革はできない」（飛鳥田）

↓

環境開発センターに協力を依頼

横浜の都市づくり：6大事業の提案

- 飛鳥田、浅田、田村らで話し合い、田村がまとめ、市庁内で検討→6大事業へ
- 6大事業
  - ①都心部地区整備（後の「みなとみらい21」）
  - ②金沢地先埋立事業
  - ③港北ニュータウン
  - ④高速道路
  - ⑤高速鉄道（地下鉄）
  - ⑥ベイブリッジ
- 飛鳥田はこれを市長から市民への提案とすることを望む→『横浜の都市づくり』（1965）田村が執筆



プロジェクト方式で

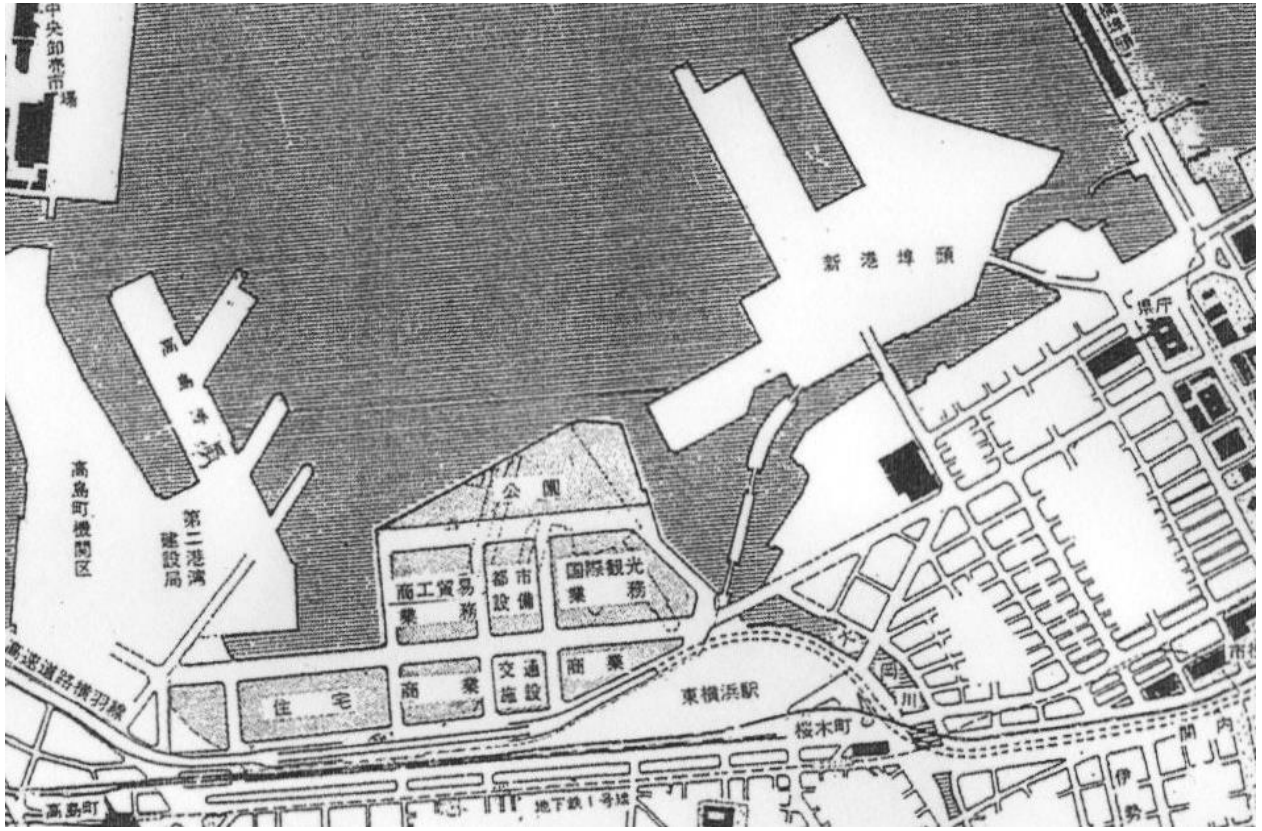
6大事業が、
飛鳥田市政と他の
革新自治体とを
分かつもの
（遠藤智世2017「革新自治体
はその政権をいかにして
発展させていったか」）

６大事業実現のため、1968田村明入庁

- 若手を集め、市長直属の企画調整室を立ち上げ（部長：田村、のち室長、局長）
- まず手を付けたもの
  ①首都高の羽横線：桜木町～関内の地下化→
  ②宅地開発指導要綱
- そのほか都市デザインにも取り組む

最大のプロジェクト：都心部整備（みなとみらい21）

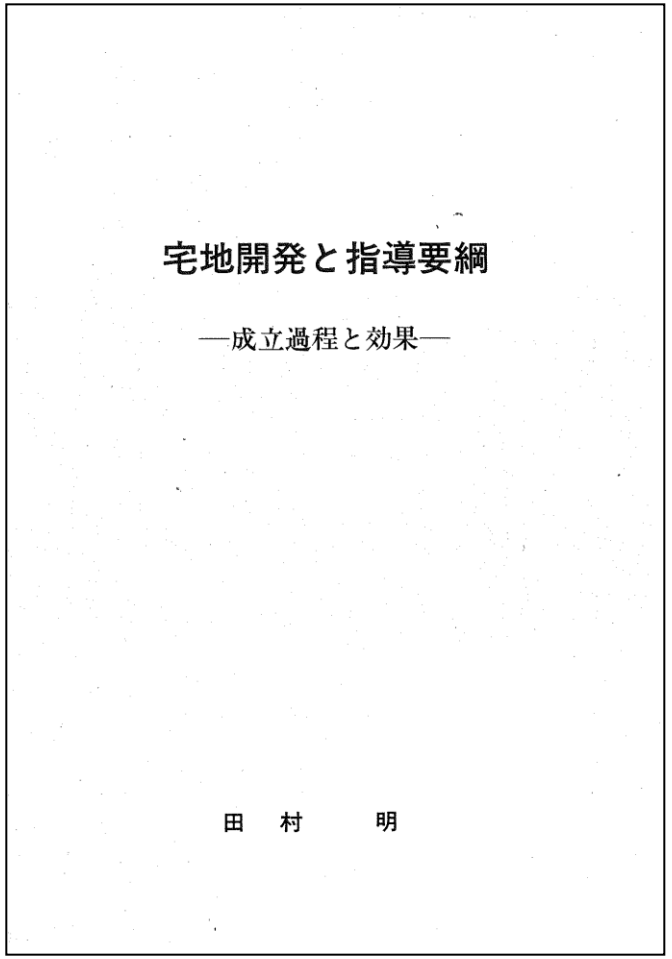
- 三菱重工造船所移転交渉しながら、三菱地所と跡地構想進める
- 田村が離れた後、埋立地を含む186haに拡大するが、業務人口優先、国際施設メーンという方針は守られる
- 「良い計画は永続する…たとえ修正されても、次の時代をつくるステップとしての役割を果たす事になる」（田村明1978「実践的都市計画論」）
- 東京湾岸の他都県臨海部開発と比べ、当初コンセプトを貫く



（田村が企画調整部長時代の都心部計画　入江明1971「三菱重工移転と跡地の利用」↑）

第4章　大学教授時代
横浜市を去り、法大教員へ

- 1978　飛鳥田、市長を辞任し、社会党委員長に。
　　細郷市長就任
- 田村は企画調整局長を解かれ、技監のみに
- 1980　「宅地開発要綱」に関する論文で工学
　　博士号取得（東大都市工学科）
- 1981　法政大学法学部教授に就任


宅地開発と指導要綱

—成立過程と効果—

田　村　　明

大学教授としての田村明は

- 大学教授＝一般的に研究、教育、社会活動、公務が仕事
- 田村明の場合＝教育と社会活動を重視
- 担当科目　「都市政策」「演習」（法大）
  「都市計画特論」（早大大学院）
- 「一方的講義ではなく、討論重視」（シラバス）
- サバティカルでイギリスへも行き、
  感銘を受け、エッセイ集を二冊刊行

[原稿は現在ここまで]

田村が描いたストーン・ヘッジのスケッチ